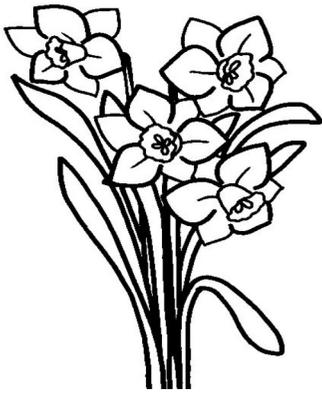


いのちの水

目次

- ・真の新しさの源泉 1
- ・わが魂は主を待てり
―心に残るみ言葉 9
- 本間勝
- ・私の歩んだ道 林晴美 10
- ・お知らせ 報告 12



私たちは勇気を失わない。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新しくされている。

(Ⅱコリント4の6)

二〇二六年 一月号 第七七九号

真の新しさの源泉

予見できない日本と国際状

況

新しい年をむかえて、一層日本や世界の状況は混乱と複雑さを増しつつある。

我が国、そして世界はどうなるのか、今日のような短期間の大きな変動―自公の分裂や自維との合同、さらには立憲と公明との合同：等々をとつても、いかなる政治家、評論家、著述家なども予見した人は皆無であつたろう。

それと同様に、戦争という国家最大の悲劇もまた、それが勃発する少し前まで、

だれも予見できなかったことが多い。

第一次世界大戦は、オーストリア―ハンガリー帝国の皇太子フランツ・フェルディナント夫妻が、ボスニアの首都サラエボでセルビア系青年に暗殺されたという事件がきっかけで、ヨーロッパ全体にひろがる歴史上で初めての大規模戦争となった。

最初に暗殺という一人の人間の仕業がなければ、またそれに誇大に反応して関連した国がセルビアに宣戦布告し、国家同士の戦争ということに発展し、ヨーロッパ全体にひろがった。

また、中国との15年戦争に關しては、アメリカなどが加わつて太平洋戦争となり、数千万人の死傷者を出した。

この大規模戦争のきっかけは、石原莞爾が中心となり、満鉄の線路を爆破し、それを中国がやつたと偽つて攻撃を始めたことが後の日中戦争、太平洋戦争へとつながつた。

このような、ごく一部の関東軍の者たちによつて、線路の小規模の爆破という不正な行動が、後に広大な中国全土に戦線がひろがり、さらに英米、豪、オランダ等々を巻き込む世界大戦となり、アジアだけでも数千万の人々が殺傷される歴史上の最大の悲劇となった。

いづれも、その大戦がはじまる直前まで、ほとんどだれもが、それほど大規模の

数千万人が犠牲となるほどの戦争になるとは予想もしなかっただろう。

それゆえにこそ、今後の世界においても、どのような政治家者、評論家、政治家たちも予見できないようなことが生じて、だれも想像もしなかったような大戦争に波及するという可能性もある。

だからこそ、軍事、暴力は決して用いないという、憲法9条が戦後成立し、非戦の精神が刻み込まれたのだった。

核兵器は、抑止力になって、永続的な平和を生み出すなどありえない。もつとも危険な兵器を多くの国々が所有するようになって、互いにさらなる増強につとめていく、いわば脅迫の増強である。

それが何の平和か。

人間がなすことは、実に多様で、ありえないようなこととも引き起こす。

どのような突発的行動を引き起こすかだれも予見できないのであるから、そのような平和は影のごとで、実態はない。

世界の国々が次々と核兵器を持つようになったとき、ある国の指導者が、何らかの国際紛争で、持つ核兵器を使用すると対抗して別の国が用いるーこのような危険性がさらに増大するのはいつまでもない。

じつさい、朝鮮戦争のとき、中国からの参戦を予想していなかった当時の司令官であったマッカーサーの予想に反して、中国から百万人の軍隊が厳冬のさなか、困難な状況において急襲し、

アメリカを主体とした国連軍は総崩れとなり、それを逆転させるためにと、原爆を数十発中国本土に投下することを、当時のアメリカ大統領に要請したほどだった。

(トルーマン大統領はそれが第三次世界大戦につながりかねないなどでその要請を拒否し、マッカーサーを解任した) このように、武力、軍事力を増大させることで、必ずそれを使おうとする指導者があらわれる。

そして、どのような人物が核兵器を持つ国の指導的人物になるか、だれも予見できない。

第一次世界大戦の勃発、日本と中国との戦争、ヒトラーの急激な台頭…等々、それらの事象とその後の世界の大きな変動ー常に無数の人々

の苦しみや多大な悲しみ、絶望…という悲劇が伴った出来事だった。

今後世界にいかなることが生じるのか、だれも予測できない。

そうした中で、さらに、かつてない困難が生じている。

それはインターネットの関わる通信、ロボット、無人攻撃機、核兵器のひろがり…偽りの情報の氾濫…これらはいかなる予期できないことにつながるか、だれも予測できない。

予見不可能な未来における確信とはー活けるキリスト

こうしたいかなる学者も哲人も知識人も予見不可能な事態が生じることに對して、何が確たる安心を与えるのか。

こうした前途不明の暗雲の

ただなかにあっても、数千
年前と変ることなく希望の
光を与え続けるのが、聖書
であり、そのもとなつた
活ける神である。

それは夜空の星がいかなる
地上の混乱や悲劇が生じよ
うとも変わらぬ光をはるか
な宇宙空間を通して輝き続
けているのがさし示す世界
である。

真実の希望は、人間のなす
こと―政治や経済、また学
問、研究、多大の知識：等々
などにはない。

政治の現状、また社会の戦
争や内乱、差別、貧困、難
民の悲惨：また絶望ゆえの
自殺等々は、学問研究や豊
かな人たちがいかに増大し
ようとも減少することがな
い。

こうした学問や研究、コン
ピュータによる果てしない

知識の蓄積：等々によつて
も、こうした本当の希望と
そこに秘められた力を与え
ることはできない。

本当の希望というものは、
神から直接与えられるもの
であつて、学問、研究、多
様な知識、経験、生まれつ
きの能力、努力：等々によ
らない。

それは、まずキリストの12
弟子たちの主要な弟子、ペ
テロ、ヨハネ、ヤコブたち
が学問など関わりない漁師
であつたこと、また対照的
に旧約聖書を学問的に研究、

学んだはずの聖書学者（律
法学者）や、その優れた指
導者に特別に学んだ使徒パ
ウロは、キリストの真理を
まったくその学問にもかか
わらず、受けることをせず、
強く拒んで、迫害の急先鋒
とさえなつて、殺すことさ

えしたと彼自身語っている。
それゆえに、パウロは、自
分自身を罪人の頭だと称す
ほどだった。

さらに旧約聖書のアブラハ
ムも羊飼いであり、最大の
神のことばとまでたかくあ
げられた詩を多数生み出し
たダビデもとは羊飼いであ
つた。

旧約聖書、否 古代世界で
歴史に重大な影響を与えた
といえるモーセもまた、若
き日には、エジプトの王子
として育てられ、旧約聖書
を学者から学ぶということ

もまったくなかつたし、イ
スラエル人と発覚して、エ
ジプトを砂漠地域の困難な
状況の中を命がけで、逃げ
延びてやはり羊飼いをし
ていた。そのさなかに、神が
現れて彼も出エジプト記の
指導者としたのだった。

エジプトの王子のときに啓
示を受けるといふこともな
く、そこから追放されて文
字通り死線を越えて生き延
びたときに羊飼いとなつて
過ぎしていたが、それは人
間の力の弱さを思い知らさ
れたときであり、そのよう
なときに、シナイ山のふも
とという砂漠地帯のただ中
で羊飼いをしていた。そこ
で神の救いを受けたのだった。

ここにも救いのために、学
問、地位が関係ないことを
示している。

また、ローマ帝国に急速
にキリスト者が増えていっ
たのは、パウロ書簡にもみ
られるように、皇帝の近く
にいる人たちにもキリスト
教は伝わり（フィリピ4の
22など）その他さまざまの
階層にある人々にも伝わっ
たが、とくに当時、帝国内

に多数存在していた奴隷たちが、キリスト教の伝播に重要な役割を果たした。

このように、聖書に示された唯一の神への信仰は、旧約聖書の時代から、新約のキリスト教の時代においても、知識人とか地位の高い人たちが中心でなく、素朴の羊飼いのような仕事をしていた人や奴隷のような質問など無縁の人たちにも啓示が与えられてひろがっていったのがうかがえる。

学問、研究にたずさわる人々は、戦後日本でも大学の急増で戦前とは比較にならないほど増加して現在では短大も含めると一千校を越えるが、戦前は国立大学は10校にも満たず、私立を含めても30校程度しかなかったのを考えると飛躍的に増大した。

しかし、唯一の神を信じる人はずっと1%程度にとどまった状況であるのも、このまったく唯一の神を信じる信仰には結びつかないことを示している。

他方、科学技術に関する学問の先端をいつている科学者たちが、原爆、水爆という一発で数十万人、あるいは数百万の人たちを殺傷し、住み処も広大な領域にわたって破壊し尽くすという恐るべきものを生み出したのである。

現代の核兵器の危機も、何人がそれを突然の決断で用いるかだれも予測しがたいゆえに、危険性がいつもただよう状況にある。

原爆は、ノーベル賞を受賞したり、それに匹敵するような核物理学の権威者(＊)

たちの研究によって明らかにになった原子核の構造やその分裂、エネルギーの発生などを駆使して作り出された。

(＊)キュリー夫妻、ベクレル、ラザフォード、チャドウィック、フェルミ、オットー・ハーペン、アインシュタイン、オッペンハイマー、湯川秀樹他

究極的な兵器であったそうしたものはかつてなき不安を黒雲のごとく、人類の前途に立ち上らせつつある。

このような時代となっても、なお、否、さらに強い光をもって我々に迫ってくるのが、聖書に記され、イエスが実際に生きてこの世界に明らかにし、ことばでもって世界に示した真理である。

「真理とは何か」このローマ総督ピラトがイエスを尋問したときに発した問いか

けは、以後二千年間、世界に鳴り響いている。

そしてその問いかけに確信をもって答えることができず、過去にどのような罪を犯したか、また善行を成したか、あるいは学問や経験、健康状態、あるいは年齢、民族、国籍：そのようなものに関係がない。

ただ神の力、愛によって、ある人の魂の扉が開かれて、神からの光を受けることによって啓示を受けることで確信が与えられる。

それは、十字架にかかられたイエスが我々人類の罪をになつて死なれたことをただ信じてこそそのイエスが神の力によって復活し、現在には聖霊となって活けるキリストとなつて、神と同じはたらきをされていることを信じていることから、道が開

かれる。

それは、全能の神の愛のはたらきの故であるから、周囲の人間にかかわる出来事も、人間が地上に存在する以前から存在した山、海、河：あらゆる動植物、大空：等々が関わっている。

真理とはそうしたあらゆる人間のこと、自然のことの背後にあつて愛をもって創造し、今も支えているそのような神の力である。

こうした真理そのものは、霊的な響きをもつて世界に響いてきた。

それは、旧約聖書の詩集にて今から三千年ほども昔に神の啓示をうけて記された内容がそれをさし示している。

： 天は神の栄光を物語り
大空は御手の業を示す。

昼は昼に語り伝え

夜は夜に知識を送る。

話すことも、語ることもなく

声は聞こえなくても

その響きは全地に

その言葉は世界の果てに向かう。
(詩篇19の1〜4)

神の霊的なことばは、すでに太陽や星々によつて物理的な音声とは異なる響きを世界に発信してきた。

そのような音、響きを、言葉として直接に他者から具体的言葉として受けとつたとき、初めて人は真理とは何かを理論とか学説とかでなく、これこそは真理だと確信する力を与えられる。

そしてその真理は聖なる風という側面をもつために、私たちの罪をもその風の力によりて吹き去り、代わりに天来の聖なる風を送ってくださいるようになる。

そこから私たちは、心の日

毎の苦しみ、問題、正しい

道、愛ある道からはずれた

ときでも、そこからその究

極的な愛そのものである活

ける主に祈るようになる。

そうした祈りは旧約聖書の

詩集たる詩篇にほかに類の

ないふかき、高さ、また広

さをもつて記されている。

その一例をあげる。

： 神様、わたしのために清
い心を創造し、

わたしのうちに新しい、

確かな霊を与えてください。

御前から私を退けず、

あなたの聖なる霊を取り上
げないで下さい。

(詩編 51 の 12〜13)

Create in me a pure heart

O God, and renew

a steadfast spirit within me.

Do not cast me away from

your presence,

and do not take your holy

spirit from me.

ここで、私たちの目にとくに新鮮なのは、私たちの本当に良き心は、決心とか読書、あるいはよき交流といった人間的なものによつては生まれにくいという洞察である。

それは、宇宙万物を創造した全能の神が、私たちの魂の世界にも清い心を創造してくださいる必要があるという認識である。

創造するという原語(ヘブル語)は、バーラーであるが、この語は旧約聖書全体で54回用いられている。そのうち創世記11回、イザヤ書21回と、この二つで6割近くを占めているほど。

しかもイザヤ書では40章以降に20回と集中している。

これはイザヤ書40章以降は、イスラエルの主だった多数

の民がバビロンへ捕囚として連行され、いつ帰れるのか、このまま民族としては滅んでいくのかという岐路に立たされていたとき、この第二イザヤと言われている預言者が現れて、神からの強いメッセージ、力づけを与えられた内容である。

新しい創造、彼らの中心であったエルサレム破壊され、イスラエルの国は滅ぼされた。ほとんど無に帰した神の民が神の力によつて奇跡的に立ち上がるということをもつて、「創造」しているために、「創造」する(バーラー)という言葉が多く用いられている。

この詩篇の個所においても、人間が根本的に立ち直るのには、決心とか友人、教師、また親族等々の他者の影響などではできない。

これは、神ご自身の全能の愛の力による創造によつて私たちの魂は清くされ、絶望やこの世の闇の中で立ち上がる力が与えられるということである。

それは言い換えると、聖なる霊―神の聖なる風を受けることにほかならない。

それゆえに、学問などほとんど一般の人々には縁のなかつた古代からきわめて学問や科学技術などが発達し現代においてまで、比較にならない時代状況の変容にもかかわらず、神の言葉はこの世界、宇宙に響き続け、また聖なる風として吹き続けているのである。

そのような驚くべき力はただ神のみがもっているのは明らかである。

人間の思想とか影響力など、こうした神の天地に及ぶ壮

大な創造の力に比すれば、マスコミやネットでもてはやされる有名人たちも、たちまち消えていく影のようなものにすぎない。

そしてさらに現代の状況における我々に大いなる意味をもっているのが、その真理は無限の愛―弱きを強め、暗黒にある者に光を与え、傷ついた葦を支え、消えようとしているともしびに新たに点火する御方であるゆえに、現在においてもただ真剣に求めるだけで、何等の費用も資格も関係なく与えられるということである。

真の新しさを生み出すもの

魂に真の新しさの実感を与えるのは、活けるキリストがその魂のうちに住むことである。

すでに述べた、詩篇51篇の

言葉にあつたこと―清い心を創造し、私のうちに新しい確かな霊を与えてください―というその願いは、新約聖書の時代になって、活けるキリストが心に住んでくださることによつてかなえられることになった。

キリストご自身が、清い完全な心であり、死によつてもこわされなかつたしかな霊そのものであるからだ。

そして、それは貧しい人でも、百歳に近い人、あるいは学者、無学な人、子ども、重度の病人、白人、黒人：どのような民族も関係なく、イエスを信じることで、だれもが、真の新しさの実感を与えるものになる、「永遠の命」を与えられる。

：イエスは言われた。「わたしは復活であり、命であ

る。

わたしを信じる者は、死んでも生きる。

生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。

このことを信じるか。

(ヨハネ11の25、26)

この問いかけはマルタという女性になされたものだが、聖書という聖なる書は、それがあつた時代のある人物に言われたことであつても、その後の世界のあらゆる人に向けられた普遍的な問いかけとなつてゐるが実に多い。

旧約聖書では、時代的、地理的制約があると見えることも多いが、実は、そのような箇所も、またそれは遙か後に現れたキリストのことをさし示す記述にほかならない。

イエスが自身が、旧約聖書

は私のことを書いてある、

：あなたがたは聖書(*)を調べているが、その聖書はわたしについて証ししている。(ヨハネ5の39)

(*)新約聖書で「聖書」と訳されているのは、旧約聖書のことである。イエスや使徒たちが活動したときにはまだ新約聖書はできていなかったからである。

この世の最大の問題は、生きること、死ぬことである。死んだら終わり、というものが大多数の日本人が漠然と持つてゐるおもいであり、宗教的心情である。

そして、死んでも終わらず、無にならず、何らかの霊―亡霊、幽霊のごとき―となつてさまよい、生きている人を脅かすと信じられていたからこそ、その死者に毎日食物などを提供して死者を供養することが大切だとき

れてきて、現在でも多くの人たちがそのことをおこなつている。

復活したイエスこそが、使徒パウロが「私の内にはキリストが住んでいる」、と言つたそのキリストである。

：もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる。

(ガラテヤ書2の20)

呼吸のごとくに、活けるキリストはパウロに霊的な命を与え続け、パウロはそれによつて生き、福音のために働き続けた。この内に生きて働くキリストのことは、いいかえると、主イエスの次の言葉と深くかかわつてゐる。

：人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一

つ一つの言葉で生きる。

(申命記8の3、マタイ4の4)

というイエスの言葉を深く、全身をもつて彼は体験しつゝ生きたのだった。

語りかけられる神の言葉そのものが活けるキリストであるから。

また、その活けるキリストのあらゆる霊的な賜物を与える豊かさ―真実なるもの、善なるもの、美なるものを与えてくださるゆえの、深い満たされた実感ゆえに次のようにさえ述べた。

：名誉・地位・生まれのよさ：等々、かつては私にとつて良きものであつたこれらのことを、キリストのゆえに何の役にもたないものと思ふようになりました。：私はそれらを糞土と見なしています。」

(ピリピ3の7、8)

これはおどろかさされるような表現だが、ヨハネもまたその福音書の冒頭にて、その活けるイエスの霊的な豊かさを証言している。

：「キリストによつてその満ち満ちた豊かさから、私たちは恵みの上に恵みを受けた」(ヨハネ1の16)

この世界のどこに、一仕事、娯楽、また名誉や評判、経済的豊かさ、人間の愛：どれをとつて、この満ち満ちた豊かさ、汲んでも汲んでもつきることなくあふれ出る豊かさを持っているだろうか。

財産、富に満ちた人であっても、かえつてこの世の豊かさゆえにさまざまの貧しい人には存在しない悩みや問題が生じ、男女という人間愛ゆえに破滅に陥る人たちは昔から後を絶たない。

そしてこれらの目に見える宝のようなものは、魂の奥深くの喜びは決して与えず、さらなる欲望や、カネに目のくらんだ者たちが周囲にまつわりつき、そこから予期しない問題が生じて心の平安や喜びを失わせていく。しかし、私たちの内に活けるキリストが少しでも住んでくださるようになると、衣食住のすべてにわたつて、小さくとも貧しくとも満たされるようになる。

その小ささのなかに、また弱きところにこそ、神の力が完全である(*)という驚くべき言葉の真実性を初めて知らされていく。

(*)私の恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうち完全に現れる。(IIコリントの12の9)

能力の小さきゆえに、罪深きゆえに、他者から見下さ

れるーしかしそれを甘んじて受けるとき、そこから心貧しきものへの祝福が与えられ、神の国はそれらの者に与えられるという約束が与えられていく。

また、愛する人、友人からの裏切り、人からの侮辱：等々の普通なら憔悴しきり落ち込んでしまう状況にあつても、主イエスの「ああ、祝福された者たちよ

あなた方、悲しむ者は！」

と語りかけ、その人からの冷遇のただなかに何にも変えがたい神の愛のはげまし、すぐそばにいてくださつてこの活けるキリストこそは、自分の悲しみや暗い谷間に突き落とされたような悲しみに打ち勝つ力と喜びを与えてくださる。

それこそ、荒野に水が染み通るように、何にも増して

魂の奥深くに染み通る平安であり喜びである。

そうした主の平安を与えられるときに、この世のものはそのようなものを決して与えることはできないこと、むしろその逆であることを深く知ることになる。

キリストが生きてわが内に住んでいる、それはそのまま永遠の命を与えられている姿そのものと言えよう。

そのことを、イエスも、すでに述べたように、ただイエスを神の子と信じるだけで、すでに死なない存在、永遠の命を与えられているのだと言われたのだった。

イエスこそは、神の本質をそのまま与えられ、万人の罪を十字架につけられることとであがない、救いだし、そして復活して聖霊となり、また活けるキリストとなつ

て信じる人の魂の内に住み続ける。

その復活したキリストとは、ヨハネ福音書やコロサイ書、またヘブル書にもその最初の部分で記しているように、
(*) 万物を創造した神と同じ存在であり、それゆえに今も万物を支えている。

(*) 万物はロゴス(キリスト)によってなった。成ったものでロゴスによらずに成ったものは何一つなかった。(ヨハネ1の1〜3)
・御子によって万物を創造し御子が力あることばで万物を支えている。
(ヘブル1の2〜3)
・万物は御子によって支えられている。

(コロサイ1の15〜17)
このように復活したキリストは、神と同じ永遠の存在となった神そのものといえる存在であるゆえに、あの広大な宇宙の星々をも創造し、支えている無限大の存

在なのである。

さらに地上の千差万別の多様性をもっている動植物、また、私たちの体の細胞の一つ一つも実に複雑多様な化学物質を反応させて私たちの心臓を鼓動させ、寝ても覚めてもその体内工場とすべき細胞のきわめて微小ななかで、大工場でも大きな高度の複雑多様な化学反応をおこなっている。

私たちの体のどこをとってもそれはそうした複雑な化学反応の結果、作り出されたもの。

生きて働くキリストとは単に心のうちに住んで、私たちを支え、喜びで満たすだけなく、そのような体内の驚くべき多様な化学反応さえも支えている存在なのである。

そのように活けるキリスト

とは、あらゆる被造物のもとにあり、今もはたらいで支えているものであるゆえ、その被造物たる日々の大空や太陽、月、星々、あるいは地上の多様な植物や海のさまざまの波の様子：それら一切もまた、全能の神の働きであるとともに、その活けるキリストの働きでもあるということになる。

一般的には、キリスト者であっても、活きたイエスをそのようにまで受け止めないということが多い。

しかし、イエスの本質は人間としての33年間で示したようなことだけでなく、周囲のはてしない自然の世界にも及んでいるのであって、み言葉にしたがってそのように、受け止めるとき、周囲の身近な自然の一つ一つがあらたにキリストのお心、

神さまの愛が刻み込まれたものなのだと感じられてくる。

実際、私は高齢となって、以前にはそれほど感じなかった、身近な大空、海、雲、遠くの山々のつらなり、多様な植物の花の美、さらに葉や幹、樹形：等々が以前よりいっそう私の心に深く入ってくるようになった。

私は太平洋につながる海の近くに住むために、その海から50メートル未満のところにあるデイサービスに、妻の恵美子さんを連れていくので、その帰りに太平洋につながる紀伊水道に面した海の大きさ、その力、またその美にいつも接している。

それゆえにその波の無限の多様性に驚かされている。

そして、それらが、私に語りかけているという実感を

与えられている。

活けるキリストがわが内に
住んでくださるとき、日々、
新しい心で、周囲のさまざま
の事物やできごとからも
新しい何かを受けとること
ができるように導いてくだ
さる。

その新しさの実感こそ、老
年がすすんでもなおかつ与
えられる賜物だと感じている。

わが魂は主を待てり

一心に残るみ言葉

本間勝

「わが魂は衛士（*）が
朝^{あした}を待つにまさり、誠に衛
士が朝^{あした}を待つにまさりて主
を待てり」（詩編13の6）

（*）衛士とは見張りのこと。

私は20代の末に2年程夜勤
の仕事に就きました。

家族や友人達、世間の人々

が皆寝静まった夜中に独り
ノルマを果す淋しさは格別
なものがありました。

幸い私の職場は屋内でした
が、屋外で務めている夜廻
りやガードマンはさぞ夜明
けを待ち望んだであろうと
思います。

私の岳父、酒枝義旗^{よしたか}教授も
若い頃苦学生で、夜は人力
車夫として働きました。

後年大学教員の傍らキリス
ト教の伝道師になり日曜集
会を始め、月刊誌を発行し
ました。集会も冊子も同じ
タイトルで詩篇130篇6節か
ら待晨（タイシン）あしたを
待つ」と名付けました。冊
子は50年月刊で続き600号
で終刊しました。

集会は80年続き今日も日曜
礼拝を続けています。岳父
の人生体験に基づいたメッ
セージの要点は

「神様は下手をなさらない。
全てを最善に導いて下さる。」
でした。私も心から同意し
拝聴しました。

現在の苦しみは過去の失敗
の報いではありません。将
来の栄光の準備なのです。
神様は下手をなさらない。
一切を最善に導いて下さい
ます。やがて夜は明け、朝
が来ます。

信じて祈り、待ちましょう！
（主日礼拝のときの心に残る
み言葉の証しとして語られた
もの）2025.12.14

私の歩んだ道

林晴美

私は生まれたときから足の
浮腫があり、それが、近く
の人からはどうしても見え
るので中高といじめられ
ていました。話す声も小さ
く、行動するのも遅くて、

ほかの子の後ろからついて
いくような子でした。
いじめはとてもつらかった
ですが、母は私の1歳の頃
から心の病があり、私の妹
が8か月で亡くなった時の
大きな悲しみを思うと、私
までいなくなるわけにはい
かない。という思いがずっと
ありました。

つぎに 集会に導かれたきつ
かけを話します。父は、盲
学校の教師をしているすぐ
上の兄である伯父に、たび
たび浮腫のことを相談して
くれていました。

19歳の頃に平方式^{ひらかた}で鍼治
療をしている鈴木益美さん
を紹介してくださり、治療
に行くようになりました。

そのときに、「いのちの水」
誌などを鈴木さんから受け
取っていました。

1999年にクリスマスマス
特別集会に誘われて参加して

います。その後、結婚して5年ほど経ち精神的に不安定になっていた。2004年10月から集会に参加するようになりました。

手話や賛美歌、植物に興味あるでしょう。と土曜日の集会からの参加を勧められました。

そして鈴木さんのはり治療院での小羊集会、大学病院に長期入院している寝たきりの人工呼吸器を装着して首から下は動かない勝浦良明さんのいる病室でのつゆくさ集会、戸川さん宅での北島集会とすこしずつ増やして参加できるようになりました。いちばんだいじな主日礼拝には午前中は苦手と言いつつしながらなかなか参加できなくて、10年くらい経ってから参加できるようになりました。

3つの持病は、14歳、20歳、33歳の時に診断

がつきました。

マタイ福音書4章4節「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。」

持病のことで悩むとき、この御言葉に励まされます。つぎに父母を通して受けた神の愛と導きを話します。

父は2011年に亡くなりました。喪主は私でしたが、父の兄弟が7人いますので、葬儀は仏式で伯父たちに取りしきってもらいました。

父の大事な葬儀、トラブルは避けたいと思ったからです。

父の3回忌に向けて準備をしているときに、母が「今回の法要が終わったら今後は晴美が主体となってしていくよ。」と言うので、

「私はキリスト教だから、仏教のことはできない。」と言いました。そうすると、私の葬儀までは仏式で。」

と言っていた母が「キリスト教に変わっても良い」と言ったので驚きました。

祖父母と妹、そして父のお骨をトラブルなくキリスト教霊園に移すことができました。母が納得いくまで時

が与えられ、人間の思いであれこれ言わなくても、神様が働いてくださることを思います。

コヘレトの言葉3章1節「何事にも時があり 天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」ことを思いました。

父の亡くなった後、私は離婚していたので、経済的なことやわたしひとりで母の支えになれるかどうか不安でした。

詩編55編23節「あなたの重荷を主にゆだねよ 主はあなたを支えてくださる。」

の御言葉に励まされました。

2019年は母に一年のうち

に次々と3つ深刻な病気の診断がされました。信仰に導かれていなければ、私自身が受け止めきれずに取り乱していたらと思う

ます。両親の闘病にしっかりと向き合うことができたのは、背後にいらっしゃる神様のお支えがあったからだと感謝します。

イザヤ書30章15節

「あなた方は、立ち帰って静かにしているならば救われる。」

安らかに信頼していることにこそ力がある。」

母のさいごの一週間は病院で泊まり付き添うことができました。危篤状態となり吉村さんに葬儀場の手配をしていただき、打合せの同席からすべて吉村さんにお

任せられました。

母の葬儀をした2020年2月は、次の週から新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言のため、礼拝はオンラインのみ、葬儀も身内だけで、となる直前でした。

礼拝のあとに集会から大勢の方に参加していただき、喪主である私に集会の皆さんの支えがあるように、という神様の愛を思いました。

詩編37編23節

「主は人の一歩一歩を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。」

いじめの時に言われたことと、また自分自身の性格などから、働けない、なにもしできない、私はだめだ、役

に立たないと自己否定する部分がありました。しかし

病気もいろいろな出来事もすべて神様の御計画であることを知りました。人間の時間と労力には限界があり、必要なタラントも異なるので、神の御用に用いるために私に必要なものを神様が備えて導いてくださったことを感謝します。大きな声で話せるようになったこと、パソコンもその一つです。

これからも信仰から離れないで、御国への道を歩んで行きたいと思えます。(2025年クリスマス特別集会)

お知らせ

「野の花」文集を同封してあります。同封されていない方、また追加希望あれば左記の吉村まで連絡ください。

報告

○元旦礼拝 1月1日午前6時半から、会場、オンライン含めて30名ほどが、新しい年の祝福を祈って参加されました。なお、90歳に近いT・Yさんは2.5キロのまだ夜明けでない寒さ厳しいなか、バスもないので、道を歩いて40分ほどもかけて参加されたことにも感謝でした。

○冬期聖書集會

(キリスト教独立伝道会主催) 1月10、11日、徳島聖書キリスト集會を会場とし、オンライン含めての開催。

今回は、「静かなる細き声」を主題として列王記上から「エリヤ」を主題として、吉村の講話と6人の方々、小林典子(福岡) 那須容平(大阪) 対馬秀夫(青森)、香西信、秋山泰典(岡山)、

赤塚牧(東京)の方々によってそれぞれ20分ほどで話されました。

また、夜の7時〜9時のグループ別祈禱会では二時間におわたつての祈りが主の支えによってなされ、よき祈りの交流となりました。

集會案内

以下の集會は対面とオンライン併用が多いです。問い合わせは左記の吉村孝雄まで。

- 主日礼拝 毎週日曜日 午前10時30分から。徳島市南田宮1丁目の集會所とオンライン(グループ・ミート)
- 夕拝：毎月第一、第三火曜日夜 19時30分〜21時
- ① 天寶堂集會：第二金曜20時〜21時30分
- ② 北島集會：第四火曜13時〜15時 第二月曜日13時〜15時
- ③ 海陽集會：第二火曜日10時〜12時

主筆・発行人 吉村孝雄(徳島聖書キリスト集會代表) 〒七七〇-〇〇〇四 徳島市南田宮一丁目1の47 電話 080-6284-3712 固定 088-631-5123 (FAX共) E-mail: ty52emeth@circus.ocn.ne.jp ○)の冊子は、読者の方々からの自由協力費で作成、発行しています。協力費をお送りくださる場合には、次の郵便振替口座を用いるか、千円以下の場合には切手でも結構です。郵便振替 口座番号 01630-5-55904 加入者名 徳島聖書キリスト集會 ○ http://pistis.jp (「徳島聖書キリスト集會」で検索)